
Velocity

鋼鉄のなごやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Velocity

【Nコード】

N0865N

【作者名】

鋼鉄のなごやん

【あらすじ】

S2000を駆る男子大生が様々なライバルに立ち向かう

登場人物

氏名：香坂 高時

年齢：20歳

職業：大学生

所属チーム：なし

説明：本作主人公で秦峠を走る走り屋。高い適応力と理論よりも感性で勝負する天性のドライビングセンスは右に出る物は居ないほど。愛機・S2000はコーナリングを重視してチューンされており、足回りやボディ剛性、空力にはかなり手を加えている。

ワンハンドステアの使い手でドリフトとグリップの中間のコーナリングをし、決まった走行ラインはなく、無数の走行ラインを使い分け、

彼が敗因を作らない限り負けはありえないとされている。また、駆け引きもかなり上手い。

「車種」

Honda S2000 (AP1)

カラー：ロイヤルネイビーブルー・パール

ナンバー：相模330 な 19-828

・「外観」

J's Racing：TYPE-Sトータルエアロシステム2.0フルキット CFRP、TYPE-Sツインカナード、カーボン・トランク

ARVOU：Fワイドフェンダー

VOLTEX：GT-WING Type-7 (ステーション間幅250mmオーダー)

VARIS：Rディフューザー+Rボルテックスジェネレーター

無限：カーボン・ハードトップ、カーボン・ボンネット

SPON：エアロミラー

Honda of the UK: 英国仕様テールライト（リアフ
ォグランプ付）

ホイール：RAYS（種類・色はランダム、前18・後17インチ
・「仕様」

使用タイヤ：YH ADVAN Neova AD08（F：25
5/35R18、R：255/40R17）

使用オイル：MOTUL

最大出力：280ps/8600rpm、26.5kgm/750

0rpm（ベンチურიビッグスロットル+ラム過給）

車重：1100kg

第1話「S2使いの若武者」

神奈川県・秦原市

それは夏の話だった。

「今度はどこに手つけようかねえ・・・」

神奈川県内にある秦原大学のメンテナンスガレージ

この大学の自動車総合工学科2年の香坂 高時は自身の愛車・S2 000のボンネットを開けながら小声でそうつぶやいた。

「おう、香坂じゃん。何やってんの?。」

同級生の谷口 純一が声を掛けてきた。

「何だよお前かよ。」

「『お前かよ』って、期待外れたような顔しやがって。で、何やってんだよ。」

「今日、秦で走るからマシンの具合見てんだ。お前来れないだろ? バイトで。」

「ああ。本当は行きたかったんだけどなあ、代わりの奴が居なかったんだから仕方ねえさ。じゃあ俺行くわ、じゃあな。」

「おう。」

そう言って純一は去った。

高時はS2000のエンジンを空ぶかしさせたりしてマシンの調子をつかがっていると、髪の毛の長い女性がガレージの前に立っていた。

「こんにちは。一体何やっているの？」

可憐で清楚な顔立ち、フワツとしたしなやかな髪、綺麗でしなやかなボデイルライン、柔らかそうで大きな胸で谷間が見える黒いVネックの半袖ロングニットを着ていた。

そんな女性が高時とS2000の前に居た。

「マシンの調子見てるんだよ。コイツと思いつきり下りをかつ飛ばすからさ。」

「それにしてもこの車カッコイイね。何っていう車なの？」

「これか？これはホンダのS2000って言うんだ。エンジンが気持ちいいぐらいに回ってくれるんだ。」

「へえ、そうなんだ。あつ、そろそろ授業始まっちゃう・・・。見せてくれてありがとね。またどこかで会おう。それじゃあ。」

そう言っただけで女性はガレージの前を去って行った。

「さあてと、今日の夕飯でも買ってくるかね。」

21時

神奈川県・秦峠

下りを高時のS2000が走っていた。

ストレートでも120km/h出るところを75km/hで走っている。

いわゆるウォームアップと言った所だろう。

すると、後ろから車が迫ってきた。エンジンはロータリーサウンドだ。

（どうすっかなあ・・・もうタイヤもいい状態だし、走ってやっか）
やがてS2000の後ろに車がピッタリ張り付く、ロータリーサウンドの車は黒いFDだった。

高時はS2000のアクセルを全開にした。

右ヘアピン手前で一気に減速。そしてブレーキングタイミングでFDが前に出る。

（しくじったと思っているが、それは大きな間違いだ。）

S2000もFDにピッタリ張り付いたまま加速する。

（パワーはFDの方が上だな。だがFDはS2と違って5速までしかない。それを考えればギア比がクロスレシオである限りこっちの

方が速いんだ。)

S2000は次の左コーナーでFDにピッタリ張り付いたまま左ヘアピンに突入。

FDがドリフトをしているイン側にS2000がドリフトとグリップの中間の挙動で入り込む。

立ち上がりでS2000はイン側、そのままFDと並びかける。

そして左高速コーナーでアウト側のFDがほんの少し減速、S2000が前に出た。

それでもFDはスリップストリームを使ってS2000に張り付く。

左コーナーから右ヘアピンに差し掛かり、S2000は直線的なラインで左コーナーを通過、そのまま右ヘアピンに突っ込む。

そして立ち上がって2つ目の左ヘアピンにS2000はフルブレーキングで突っ込む。

(相当腕あるな・・・向こうのFD)

S2000とFDはテール・トゥ・ノーズのまま右ヘアピンに突っ込む。

S2000はややスライドさせながら、FDはドリフトでどちらもハイスピードなコーナリングで抜ける。

ヘアピンを立ちあがったストレートではS2000が引き離して行

く。

（やっぱ5速のFDはかなり苦しいだろうな。）

高時の思惑通りだろう。

しかしFDもスリップストリームを使ってS2000に食らいつく。

高時がバックミラーを少し確認する。すると。

（FDのタイヤもそろそろ限界来てそうだな・・・）

だがFDも追い付こうと必死だ。

右ヘアピンにS2000はアウトから進入するライン。

しかし、FDはS2000のインを突いて進入で前に出る。

（突っ込みすぎだ！）

FDは立て直しが困難と判断したのか、サイドを引いてリアをロックさせ、スピンさせる。

そして逆方向に向いたFDが完全にアウト側の車線に入った瞬間に、S2000は立ち上がって抜けていく。

FDはクラッシュせずそのまま上手く停止、S2000も立ち上がった所で止まった。

S2000から高時が降り、FDのドライバーの無事を確認しに行



第1話「S2使いの若武者」(後書き)

F Dのドライバーはどんな人物なのか!?

第2話に続く

第2話「ロータリーロケットの少女」

高時がFDに駆け寄ってドアを開けた。

「大丈夫か！」

「無理・・・しすぎちゃったかな・・・」

FDに乗っていたのは高時が昼に会った女性だった。

「お前・・・あの時の・・・。まあそんな話は後だ。とりあえず麓まで降りないと・・・車、動かせるか？」

「うん・・・」

高時もS2000に乗りこみ、2台共麓のPAに行く事にした。

秦峠の麓PA

「飲みな」

高時は女性にミルクティを差し出した。

「ごめんね・・・迷惑かけちゃって・・・」

「気にすんな。事故らなかつただけ幸いだったんだからよ。」

「すごかったよ、あの走り。まるで手品でも見ているようだったな。」

ところで、あなたの名前、なんていうの？」

「俺か？俺は香坂 高時。お前は？」

「アタシは杉崎 恵。よろしくね」

「ああ、こっちこそよろしく頼むよ。しかし、どうして俺が走っている所をやってきたんだ？」

「アタシ、18で峠を走り始めてからずっと一人で走ってたんだ。高校の時は走る仲間が居なかった。香坂くんが今日ここを走って聞いたから、一緒に走れたらいいなと思って。一緒に走ってて、楽しかったよ。」

「そうか。そう言ってくれと、走り甲斐がある。」

「また、一緒に走りに来てくれないかな？」

「いいぞ。いつでも来い。昼の暇な時はいつでも大学のガレージで遊んでるからよ。そっちに居るから、いつでも声かけろよ。」

翌日

高時は大学のメンテナンスガレージに居た。

何時ものようにS2000をいじっていた。

その横にはADVAN Neo va AD08が1セット2輪ずつ積んであった。

手前に積んである方のタイヤは黒いRE30、奥のタイヤは銀のTE37が着いていた。

TE37に履いているNeovaの方が太く、タイヤの横の部分には『RL』や『17in』とチヨークらしき物で書かれていた。

そこに恵がやってきた。

「退屈だったから来ちゃった。邪魔だったかなあ？」

「見てるだけなら、邪魔でも何でもないさ。」

高時はS2000にタイヤをはめながら答えた。

「あれ？、ホイールの色が違っけど、これは？」

「これが、これは適当に選んだ。前後とも無理矢理同じ物にしようと言う気は更々ないからな。」

「そうなんだあ。じゃあ、ホイールは2セットしかないの？」

「いや、これだけじゃないな。ツレの家がやってるショップにたくさんある。」

「そこでそのS2000を見てもらってるの？」

「勿論。偶にそこで俺が作業やるしな。」

「あつ、もうすぐ授業だ。今日も走りに行くの？」

「ああ、行くぞ。」

「じゃあアタシも行くから、授業終わったら一緒に行こつ。それじゃあまた後でここに来るね!。」

そう言つて恵は急いで講義会場に向かった。

と、高時の携帯からバイブ音がした。

「もしもし」

>よう、香坂。今大丈夫か?<

「どうした藤城。今なら丁度ヒマだぞ。」

電話の相手は藤城 俊矢。香坂の幼馴染で香坂のS2000のチューンとメンテナンスを請け負っている人物だ。

>そう言えば今日、秦の下りでマシンセットやるつてたよな?<

「ああ、で、どうした。」

>俺は現地で待ってるから、大学からそのまま行ってくれ<

「オッケー。後、客人が増えたんでそれだけは知っておいてくれ」

>わかった。それじゃあ切るぞ<

高時は携帯をしまつと作業に取り掛かった。

そして放課後

ガレージの前に黒いFDが止まる。

FDから、恵が降りてきた。

その頃高時はS2000のウイング角を調整していた。

「かなり待たせちゃったね。準備はできたの?。」

「とりあえず大丈夫だ。このままでも行けるぞ。」

「そう、それじゃあ行こっか。」

高時はうなずくと、S2000に乗りこんでガレージから出てきた。

「じゃ、行くぞ。」

恵もFDに乗りこむとS2000の後に付き、2台とも出発した。

第2話「ロータリーロケットの少女」(後書き)

恵も加わり、新たな物語が始まった。

第3話に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0865n/>

Velocity

2010年10月15日21時19分発行